

回で、カタクチイワシ41トン、マイワシ46トン、計87トンを漁獲し、元の活きエサ販売業者に供給しました。これらのイワシ類はのべ170隻のかつお一本釣り船に提供されましたが、これは全体の供給量の約1割（遠洋かつお一本釣り漁船による活きエサの輸送試験による提供を加えると15%）にあたり、漁業者から大変感謝されました。

また、省力化の工夫により3隻で乗組員も合計11人という少人数で操業できることを実証し、移し替えに弱いイワシ類にダメージを与えないで活魚運搬船に移送することにも成功しました。

今回の調査は、震災後、準備期間が短い中で集中して問題を解決していく必要がありました。水産庁、宮城県、宮城県漁業協同組合の全面的な支援の下、何よりも用船を引き受けていただいた銚子漁業協同組合所属の伊東丸漁業の全面的な協力を得て実施することができました。

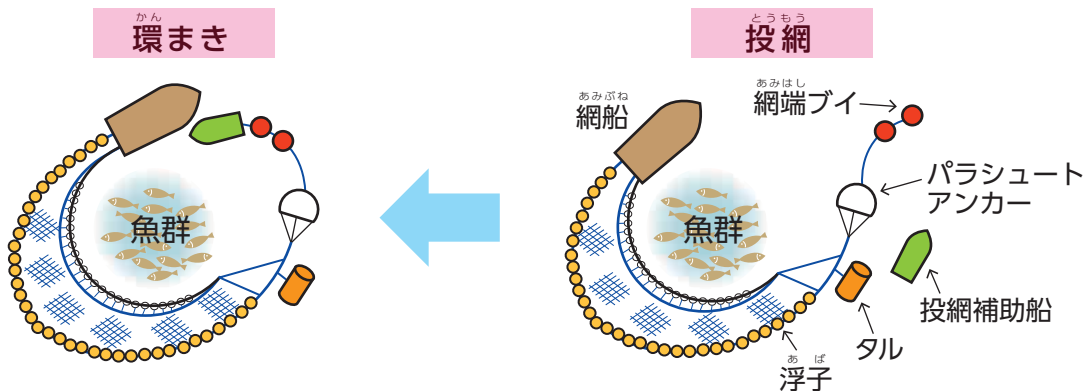


図. 「1そうまき」の投網方法の一つパラシュートアンカー方式

東北区水産研究所成果報告会

「東日本大震災の漁業への影響と今後の調査研究」を開催

東北区水産研究所成果報告会を2012年2月18日に仙台市内のTKPガーデンシティ仙台で開催しました。今回は、東日本大震災が東北地方の漁業などに与えた影響調査の概要報告と、今後の取り組みべき業務についての意見交換を目的としたもので、漁業関係者、行政担当者、研究者と一般市民など約60人の参加がありました。



調査結果を報告する資源海洋部の山田部長



質疑応答ではいろいろな質問があり関心の高さがうかがえました

東北沖合域・仙台湾と宮古湾の漁場環境、三陸沿岸の養殖業に今回の震災が及ぼした影響についての報告を行い、貝毒プランクトン・シストの密度が高かったことの理由、地盤沈下や底質の変化がアマモ場の回復に与える影響などについて質疑応答を行いました。今後は、調査結果をより正確にかつ迅速に漁業関係者に伝えること、アワビ、カキ、サケなどの魚介類が増えるような技術支援を要望していただきました。